



清教学園 創立 75 周年

「光の子として歩みなさい」

2026 年 9 月

聖書科教諭 中島 瑞樹

あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています。
光の子として歩みなさい。 (エフェソの信徒への手紙 5 章 8 節)

9 月になりました。学校も二学期が始まって少したち、発表に向けての練習や、次の試験において、部活動も次の試合に向けてと、それぞれが次の目標に向かって歩んでいるところです。

クラスや学校の中を見渡してみると、リーダーとして皆を引っ張っている人、自分のペースでコツコツと努力を重ねている人、そして周りに温かいポジティブな声をかけたり、心地よい空気を作ってくれている人など、それぞれの場所で頑張っている姿をよく見かけます。それはとても輝いて見えます。

この生徒の輝きは面白いもので、普段私たち教員が気づかないところを照らし、教えてくれます。それはまるで、スポットライトのようです。

本学の降誕劇でもスポットライトはよく使われます。降誕劇とは、本学で毎年 12 月に中学 2 年生が演じるイエス様の誕生（これを「降誕」と言います）の物語のことです。

イエス様の母マリアや羊飼いや、ナレーターなどの役を演じるとき、ハンドベル隊や聖歌隊、リコーダー隊が演奏するときに、スポットライトはそれぞれを照らして、暗闇の中から「今からが定番ですよ!」ということを観客に伝えてくれます。それによって私たちは光の先に集中し、物語に入り込むことができるのです。光は引っ張っていく役割をしてくれます。

それ以外にもライトには役割があります。羊飼いの登場シーンなど真っ暗な場面では、あえて派手に照らさず、少し薄暗い色にすることで暗さを表現します。その後、背景にある大きな星を照らして、暗さとの差を出します。だんだんと明るくなるこの様は、コツコツと歩み続けて頑張ってきた羊飼いやに対する未来を意味するといえるでしょう。

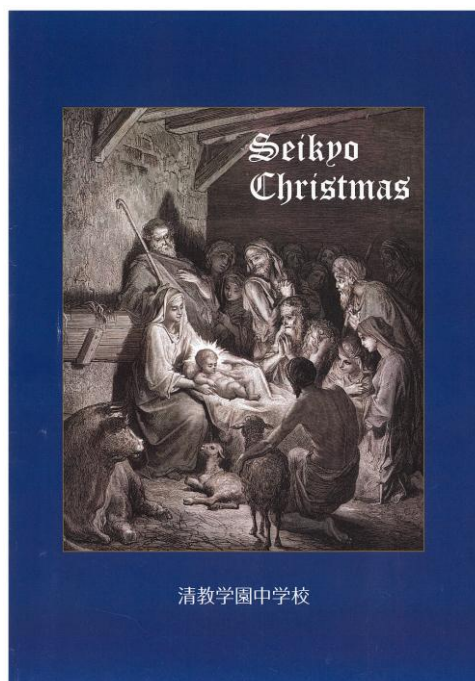
反対に光が全くなかったらどうでしょうか。混沌とした暗闇、深淵とどこまでいっても真っ暗な世界が広がります。見えないからこそその不安や恐れはもちろんのこと、それによってバレないがゆえに悪いことをする人も現れるでしょう。苦しむ人が生まれます。



ただそこに光が差し込むことによって、だんだんとその不安は解消されていきます。光によって希望が見出されるからです。さらに光によって温かくなり、空気が心地よくなっていきます。

この聖書箇所からわかるように、私たちは「もう」光となっているということです。神様は決して、「光り輝くものになりなさい」といっているわけではありませんし、「努力をして輝くように」と言われているわけではありません。なぜなら私たちはもう光り輝き、光の子となっているからです。だからこそ私たちは、ときには周りを引っ張り、あるときはコツコツと頑張り、そして温かい心地の良い空間を作っていくことができるのです。

神様からいただいた賜物を活かして、周りを照らすことができるような人になってほしいと願っています。ぜひ、光の子として歩いていってください。



（降誕劇の台本の表紙）